

法政大学キャリアデザイン学部における低学年からのキャリア形成支援の現状と課題： キャリアアドバイザーとしての取り組み事例から

小玉, 小百合 / KODAMA, Sayuri

(出版者 / Publisher)

法政大学キャリアデザイン学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

生涯学習とキャリアデザイン：法政大学キャリアデザイン学会紀要 = Lifelong learning and career studies

(巻 / Volume)

2

(開始ページ / Start Page)

91

(終了ページ / End Page)

102

(発行年 / Year)

2005-02

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00004346>

〈報告〉

法政大学キャリアデザイン学部における 低学年からのキャリア形成支援の現状と課題

～キャリアアドバイザーとしての取り組み事例から～

法政大学キャリアデザイン学部キャリアアドバイザー 小玉 小百合

1. 問題意識と目的

近年、大学生の就職率の低下¹や離職率の高まり、若年者のフリーター問題などから、大学におけるキャリア形成支援への取り組みに注目が集まっている。これまで大学では、就職部を中心とした大学卒業後の就職支援として、就職活動を目前に控えた3・4年生を中心に「企業を招いての会社説明会」や「就職希望者に対する就職ガイダンス」、「就職内定者による就職体験談発表会」などを実施し、就職活動に必要なスキルの指導、求人と学生とのマッチングなどに取り組んできた。しかし労働政策研究・研修機構(2004)²の調査によると、こういった取り組みが「順調である」と回答した大学は50%を超えるものはなく、全体的に大学の就職支援策が必ずしも上首尾に行われている現状にないことが指摘されている。特にこれらの就職支援策については、「学生の参加者が少ない」や「学生の就職に対する意欲が低い」などの問題点が指摘されており、学生にどのように働きかけるかが一つの課題になっている。

このような問題への対策として最近では、低学年から継続的に就職支援を実施することの必要性が叫ばれ、従来の3・4年生を中心とした「就職支援」だけでなく、低学年のうちから学問と職業を関連付けて考えることを学生に意識づけ、学生が主体的に進路を選択する能力を育てるための「キャリア形成支援」に力を入れる大学も増えてきている。先駆的な大学ではすでに、低学年の学

生に対して自己理解を促し、働くこととは何かを考えさせる講義を開講したり、インターンシップを正規の教育課程として取り入れたりと、様々な取り組みを始めている。例えば低学年からのキャリア形成支援に以前から積極的に取り組んでいる立命館大学では、1999年11月に就職部をキャリアセンターへ名称変更し、従来のスキル指導やマッチング中心の就職支援から、就職活動に限らず学生と4年間トータルなかかわりを持ち、その生き方を支援するための取り組みを実施している³。

しかしこういった取り組みも、実施しているすべての大学で必ずしも順調に進んでいるとは言えないのが現状のようである。日本私立大学連盟就職委員会(2004)⁴によると、キャリア形成支援科目を開設している大学は増加しているものの、これらはトップダウン方式か教員就職部長あるいは学生の就職支援に熱心な教員が中心で、教授会を説得して開講したようなケースが目立ち、開講しているキャリア形成支援科目についても、今後体系的な講義内容にすることや、必修単位化する必要性などが課題としてあげられている。またキャリア形成に効果のあると言われているインターンシップについても、体験した学生にとっては教育効果が認められているものの、参加を希望する学生に比して企業の受け入れ人数が不十分であったり、有名企業に学生の希望が集中したりと、問題も多い。

このように低学年からのキャリア形成支援に対しては、その必要性が認識されているものの、ま

だ取り組みの事例も少なく、様々な問題があるのが現状のようである。しかし近年の若年者の就業に対する問題意識の高まりから考えても、今後低学年からのキャリア形成支援に取り組む大学がさらに増えていくことは間違いないだろう。このような背景から本稿では、筆者がキャリアアドバイザーとして取り組んできた低学年のキャリア形成支援の事例をもとに、具体的な取り組みを紹介する。さらにその事例から、大学における低学年からのキャリア形成支援にはどのような方法があり、その実施にはどのような取り組みが必要なのかについて考察するとともに、低学年からのキャリア形成支援の今後の課題を検討することを目的とする。ここで取り上げる事例が、大学における低学年からのキャリア形成支援を考察する上で十分な要素を満たしているとは言えないが、今後新たに低学年キャリア形成支援に取り組もうと考えている大学にとっては、具体的な取り組みの方法を検討する上で一つの材料となるであろう。

2. 研究の方法

本研究では大学における低学年からのキャリア形成支援の方法について考察するために、キャリアアドバイザーという立場で筆者が取り組んできた低学年からのキャリア形成支援の具体的な試みを時系列で紹介し、それぞれの取り組みの効果を分析する。本研究では「低学年」を大学1・2年生とし、「キャリア形成支援」を、学生が主体的に進路を選択するための能力を育てるための支援と定義する。

なお分析にあたっては、筆者の経験による知見だけでなく、学生に実施したアンケート調査結果などからその効果について客観的な分析も試みることにする。

3. 法政大学キャリアデザイン学部による新しい試み

(1) 法政大学キャリアデザイン学部とは

法政大学キャリアデザイン学部（以下、当学部）は、「自分らしい生き方」をするためにどのよう

な知識、技術を身につければ良いかを考え、実践することをコンセプトに、2003年4月に新設された学部である。2004年9月現在、1年生306名、2年生311名、計617名の学部生（以下、学生）が学んでいる。

当学部では、仕事、家族・友人関係、コミュニティ、遊び・文化・スポーツ活動など、人間の生活にとって必須の要素を相互に補完しあいながら、人生の様々なステージで、経験・実績や経験的、理論的な学習活動を積み重ねることを通じて、能力を発揮、習得、蓄積しながら、全体として一人の豊かな人間として自己実現をはかっていくプロセスとその結果の蓄積を「キャリア」と考えている。そしてこのような過程を、一人ひとりが自分自身で意識的に組み立てていくことを「デザイン」としている⁵。

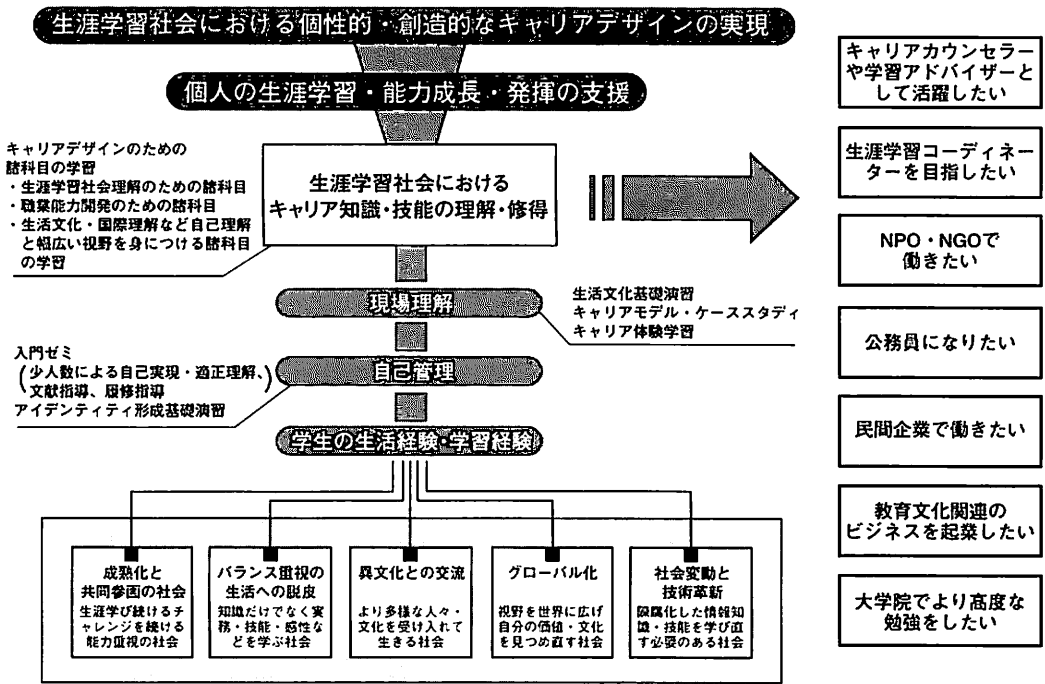
以上のようなコンセプトのもと、当学部では自分らしい生き方を考えるために、教育学、経営学、生活文化論・コミュニティ研究を総合的に学びながら、自己理解と現場理解を進めることができるカリキュラム構成を採用している。さらに総合的な学びや将来の進路選択をサポートするために、2004年度は、学部専属のキャリアアドバイザー3名を配置している。当学部の1年生から4年生までが揃う完成年度の2006年には、全員で4名のキャリアアドバイザーが配置される予定である。

①カリキュラムの内容とその特長

当学部のカリキュラムの全体構成と将来の進路を示したものが、図表1である。

自己理解のためのカリキュラムには、少人数制のゼミ形式で自己発見や適性理解を深める「入門ゼミ」や「アイデンティティ形成基礎演習」がある。現場理解のためのカリキュラムには、同じく少人数制のゼミ形式で日本や世界の文化について学ぶ「生活文化基礎演習」や、様々な職場で実際に働く職業人から仕事経験を聞き、自らのキャリアを考える「キャリアモデル・ケーススタディ」、実際の職場で仕事の体験をする「キャリア体験学習」などがある。このように当学部のカリキュラ

図表1 カリキュラムの全体構成⁶



ムは、自己理解や現場理解を深めた上でキャリアデザインのための諸科目を学習することで、キャリアの知識を理解し、その技術の修得を目指すことのできる構成になっている。

このようなカリキュラムで学んだ後の進路としては、民間企業への就職以外にもキャリアカウンセラーやビジネス起業など、様々な進路先を想定している。しかし各自のキャリアデザインは、大学4年間の学習で完結するものではない。大学卒業後も大学で学んだ知識や技術を、実社会における自分の能力成長や発揮に活かしながら、各自が自らのキャリアデザインを実現してもらうことが最終的な目標である。

②科目紹介

では具体的に、当学部ではどのように自己理解のためのカリキュラムや現場理解のためのカリキュラムが進められているのか、次にその内容を紹介する。

【科目紹介1】自己理解のためのカリキュラム 「入門ゼミ」

自己理解のためのカリキュラムの一つ「入門ゼミ」は、自分の適性や能力を知り、将来を考えることを目的とした1年生対象の必修科目である。この科目は、30名前後の少人数制で授業が行われる点、自己理解を深めるために履修者全員参加の合宿が実施される点、進路分野研究のための集中授業が行われる点が特徴である。

合宿実施の目的は、キャリアデザイン学部での大学生活をスタートするにあたり、改めて自分自身を見つめなおし、自己理解を深めることと、4年間共に学ぶ教員やキャリアアドバイザーや学生同士でのコミュニケーションを深め、キャリアデザイン学に対する問題意識を高めることである。2004年の合宿は2泊3日で図表2の内容で開催され、グループワークを中心に、教員やキャリアアドバイザーによるワークショップ、職人や実務家による職業人講話などが行われた。グループワークでは、5・6名のグループに分かれ「自分にと

図表2 2004年度合宿日程表

1日目	第1回 グループワーク
	第2回 グループワーク
	2年生を交えての交流会
2日目	第1回 ワークショップ
	職業人講話
	第2回 ワークショップ
	レクリエーション
3日目	第3回 グループワーク発表会

っての理想の社会人は？ そうなるためにはどうしたらいいのだろうか？」や「キャリア形成のために、人と人の繋がり、人と人の信頼関係を構築するには、どうすればよいのだろうか？」などのテーマから一つを選び、選んだテーマについてグループのメンバー同士で話し合い、その結果をグループごとにまとめ、一つの成果として最終日に発表した。今回の合宿には、教員やキャリアアドバイザーに加え、同学部の2年生22名がサポーターとして参加し、交流会やレクリエーションの企画・運営だけでなく、会場設営や写真撮影などのスタッフ業務も担当した。1年生にとってこの合宿は、これから自分が学ぶキャリアデザイン学部とは何かを知り、教員やキャリアアドバイザー、そして先輩や同級生など、様々な立場の人々との交流を図る機会になっている⁷。さらに合宿終了後は各自、グループワークでの発表成果を自分の言葉で文章化しレポートにまとめる課題と、これまでの自分自身の人生を振り返り文章化する自分史作成の課題に取り組んだ。

さらに後期には、進路分野研究のための「集中授業」が実施された。この集中授業では、興味のある分野の職業人から話を聞くことで、職業への関心を持たせることを目的としている。集中授業の後、各自将来どんな進路に進みたいのか、そのためにこれからの大学生活をどう過ごしていけば良いかなどを考えさせるためのレポート作成が課さ

れた。

【科目紹介2】現場理解のためのカリキュラム 「キャリア体験学習」

現場理解のためのカリキュラムには、「キャリア体験学習」がある。この科目は、職場で仕事の現場を経験し、職業観の形成を図ることを目的としたもので、いわゆるインターンシップを単位として認める科目である。これは2年生以上が履修できる科目であるが、履修には、社会人の基本であるコミュニケーションの方法や、話し方などのビジネスマナーを学ぶ科目「職業能力ベーシックスキル」を履修していることが条件になっている⁸。

この講義ではまず、体験学習とはどんなもののかの概要を説明するオリエンテーションが実施される。学生はこのオリエンテーションに参加した後、2つのコースから自分の希望する体験学習方法を選択することができる。1つは、大学側が準備した職場から希望する体験学習先を決定する「学部準備コース」、もう1つは学生自身が自分で受け入れ先を探して、受け入れのための交渉や準備を行う「自己開拓コース」である。

「学部準備コース」を選択した学生は、希望体験学習先を提出した後、担当教員との面談により体験学習先を決定する。その後各自で決定した実習先と連絡を取り、大学の休みを利用して職場での実習を体験する。体験学習期間は職場によって様々で、数日のところもあれば約1ヶ月に及ぶと

ころもある。各学生は職場での実習を終えた後、自らの体験を報告書にまとめて提出する。

(2) キャリアアドバイザーとは

①制度

当学部の特徴は、このようなカリキュラムの他に学部専属のキャリアアドバイザーが配置されている点にある。キャリアアドバイザーという一般的なには「就職支援」の目的で配置されている場合が多いが、当学部では就職支援だけでなく、学習支援も含めたキャリア形成支援を担当する学部専属のスタッフとして配置されている。キャリアアドバイザーは、3人の教員で構成されたキャリアアドバイザー制度運営委員会によって組織され、委員会の教員と協力しながら、さまざまな業務（詳細は以下4で紹介する）を担当している。

②キャリアアドバイザーの能力要件

当学部のキャリアアドバイザーは、就職支援だけでなく、学習支援も含めたキャリア形成支援を担当するスタッフとして配置されている。このような役割を期待するスタッフの能力要件として、当学部では図表3の項目をあげ、採用条件を次のように規定している。

まず「(1) キャリアデザイン学部の教育に関連

する学問領域を大学院修士課程で修了しているか、それと同等の研究実績を有すること」と、「(2) 学生に助言し、あるいは学生のあるいは学生の学業成績などの評価にも関わる業務を補助するなどの主要な業務にふさわしい人生経験あるいは職業経験、健全な見識などを持っていること」の両方を満たしていることを条件としている。さらにその上で、「(3) 学生、社会人、その他一般の市民に対する教育、研修、指導・援助、相談・カウンセリング、チューター、学習プログラム開発等の、キャリアデザイン学部で行おうとする業に関連する実務経験を持っていること」又は「(4) 体験学習（インターンシップ）を実施したり、職業指導を行うために、学校・企業・団体・政府・自治体その他を訪問して必要な業務を行ったり、職業などへのガイダンスをするにふさわしい経験と知識、能力を持っていること」のどちらかを満たすことを条件としている。

このような条件から、当学部がキャリアアドバイザーに対して専門的知識だけでなく、その知識を実践に活かして、学生を支援する実務能力を求めていることがわかる。

4. キャリアアドバイザーとしての試み

当学部ではキャリアアドバイザー配置当初、そ

図表3 キャリアアドバイザーの能力要件

(1) キャリアデザイン学部の教育に関連する学問領域（例えば学習指導、進路指導、職業指導、職業選択、人材開発、キャリアカウンセリング、教育心理など）を大学院修士課程（博士課程前期）で専攻して修了していること。または、これと同等の研究業績を有すること。
(2) 学生に助言し、あるいは学生の学業成績などの評価にも関わる業務を補助するなどの主要な業務にふさわしい人生経験あるいは職業経験、健全な見識などを持っていること。
(3) 学生、社会人、その他一般の市民に対する教育、研修、指導・援助、相談、カウンセリング、チューター、学習プログラム開発等の、キャリアデザイン学部で行おうとする業に関連する実務経験を持っていること。
(4) 体験学習（インターンシップ）を実施したり、職業指導を行うために、学校・企業・団体・政府・自治体その他を訪問して必要な業務を行ったり、職業などへのガイダンスをするにふさわしい経験と知識、能力を持っていること。

の担当業務として、学生個々の相談に応じる「相談業務」と、学生に役立つ情報を集め、提供する「情報収集・提供業務」を想定していた⁹。「相談業務」とは、学部には設けられた専用の相談ルームで、学生からの履修に関する疑問、課題の作成に関する質問、資格取得や進路選択に関する相談など、様々な相談に応じるものである。「情報収集・提供業務」とは、学生が関心を持つ資格取得に関する情報や学習を進める上で参考になる文献の情報、進路選択に役立つ情報などを集め、学生に情報提供するものである。

このようにキャリアアドバイザーには大まかな担当業務が決められていたものの、具体的な実施方法は明確なものではなく、実際にこれらをどのように進めていくかが大きな課題であった。次にこれらの業務をどのように進めていったのかについて、2003年4月から2004年10月までの1年半の取り組みの様子を紹介する。

(1) 1年目 (2003年度) の試み

1年目は2名のキャリアアドバイザーでスタートした。2003年度に新設された学部のため、1年目はどんな学生が入学してくるのか、入学してきた学生がどんな支援を求めてくるのか全くわからない状態だった。そこでまず入学してきた学生に対して、キャリアアドバイザーとしてどのようなキャリア形成支援ができるのかを検討するために、担当業務を具体的に①入学アンケートの実施、②ニュースレターの発行、③授業への参加、④個別相談、⑤相談会の開催、の5つの試みとして実践することとした。次にそれぞれの試みの内容を紹介する。

①入学アンケートの実施

まずキャリアアドバイザーとして学生に接していくにあたって、学生にキャリアアドバイザーの存在を認知してもらい、キャリアアドバイザー自身も学生がキャリアアドバイザーにどのような支援を求めているか知る必要があると考えた。そこで新入生全員を対象に、入学アンケートを実施し

た。このアンケートは当学部から新入生全員に渡される資料とともに配布し、大学が実施するオリエンテーションの場で回収した。アンケートでは大きく分けて、「どんな科目に興味があるか」、「将来はどんな進路を希望しているのか」、「キャリアアドバイザーをどう活用したいと思うか」の3つについて回答を求めた。

実施した結果、回収率は約95%であった。アンケート集計の結果「どんな科目に興味があるか」については、教育系と経営系の科目に興味を示す学生の割合が高く、「将来はどんな進路を希望しているのか」については、民間企業への就職や公務員¹⁰、キャリアカウンセラーを希望する学生が多いことがわかった。しかし将来の進路については、まだ進路が決まっていない学生も30%程度いた。さらに「キャリアアドバイザーをどう活用したいと思うか」については、履修に関する相談がもっとも多く、次に進路や就職に関する相談や情報提供を求める学生が多いことが明らかになった。

②ニュースレターの発行

入学してきた学生にキャリアアドバイザーの存在を認知してもらうとともに、キャリアアドバイザーからの情報提供を目的に、毎月1回ニュースレターを作成し発行した。ニュースレターには主に、教員紹介や大学で実施された行事、資格や文献の紹介などの記事を掲載した。4月にはニュースレターの編集を手伝ってくれる学生を募集し、翌月からは教員紹介のコーナーの取材、原稿の執筆を学生に担当してもらった。

③授業への参加

キャリアアドバイザーは授業を担当しないため、どうやって学生にその存在を知ってもらうか、また学生とどう関わりを持つかは、学部にとってもキャリアアドバイザーにとっても一つの課題であった。そこで、キャリアアドバイザーが一人でも多くの学生と関わりを持つ機会を作るために、学部教職員からの提案で、キャリアアドバイザー

が授業にかかわる取り組みを実施した。具体的には入門ゼミ合宿へ参加し、グループワークのサポートやワークショップの担当、合宿終了後の課題であるレポート作成のアドバイスなどを担当した。

④個別相談

個別相談は、学生に相談ルームに来室してもらい相談に応じるという形で対応した。当初は相談を希望する学生に事前に電話かメールで予約をしてもらい、指定した時間に相談に来てもらう体制をとっていた。しかし次第に予約をせず、思いついたときに相談ルームに立ち寄り、キャリアアドバイザーの時間が空いていれば相談していく学生が多くなっていったため、予約を義務付けずにキャリアアドバイザーが勤務している時間¹¹は相談に応じる体制にした。ただし、1回当たりの相談時間は原則として1時間までとし、それを越える場合には日を改めて相談に来てもらうこととした。

⑤相談会の実施

個別相談は相談ルームという専用の部屋で実施されることもあり、相談のない学生はキャリアアドバイザーを利用する機会がない。そこで1年目は、相談のない学生にもキャリアアドバイザーの存在を知ってもらうために、当学部の全学生を対象とした相談会を実施した。相談会は学籍番号ごとにキャリアアドバイザーと話ができる期間を設定し、学生全員が利用できる機会を設けた。

(2) 1年目の試みの効果と課題

以上のように、1年目は5つの試みを実施し、キャリアアドバイザーとして学生に対してどのようなキャリア形成支援ができるのかを検討した。その結果、学生にキャリアアドバイザーの存在を認知し活用してもらうという点で、学生からの最も反応があった試みは③授業参加であった。学生に対しては、①入学アンケートや②ニュースレターなどでキャリアアドバイザーの利用方法などを紹介したものの、実際には履修に関する相談など、

具体的にすぐに解決が必要な問題がないとキャリアアドバイザーを利用しない学生が多い。また⑤相談会の実施も、ある程度の利用はあったものの、実際には当学部の学生全員が利用するまでには至らなかった¹²。ところが実際に授業に参加して学生と接し、相談ルーム以外の場所で学生と話をしてみると、学生の多くは、それぞれ進路選択や大学生活について様々な不安や問題意識を持っていることがわかった。このように相談ルーム以外の場所で様々な学生からの話を聞くことは、キャリアアドバイザーの存在を知ってもらうことだけでなく、キャリアアドバイザーが今後、学生に対してどんなキャリア形成支援ができるのかのヒントを得る機会になった。また相談ルーム以外で話をしたことがきっかけとなり、後日相談ルームに相談に訪れるようになった学生もいた。

③授業参加以外にも④個別相談は、利用した学生からの反応が大きかった。2003年度は1年間で291件の相談があり、その中で最も利用率が高かったのは、入学直後の履修に関する相談であった¹³。履修相談では、大学の履修方法についての基本的な相談がほとんどであったが、履修相談を通じてキャリアアドバイザーに履修以外の相談もできることを知り、日を改めて進路選択や資格取得に関する相談などで相談に訪れる学生、キャリアアドバイザーへの個別相談を利用した友人に勧められて相談に訪れる学生などもいた。しかし学生は定期的に相談に訪れることは少なく、授業の空き時間を利用して、思いついた時に相談に来るものがほとんどであった。そのため個別相談では、継続的・計画的に学生のキャリア形成支援をするというよりは、必要に応じて時には学生に情報やアドバイスを与えたり、また時には学生の話に耳を傾けたりすることで、当学部には学生の大学生活や将来の進路選択を支援してくれる存在がいるということを認知させる機能を果たしたといえる。このようなことから、キャリアアドバイザーとできるキャリア形成支援は、個別相談や情報提供だけでなく、授業の参加などを通じて、相談ルーム以外での学生との関わりを通じてできるもの

があることがわかった。

(3) 2年目(2004年度)の試み

上記のように1年目は5つの試みを実施したが、2003年度は1年生だけだった当学部も、2004年度には新入生が入学し、キャリアアドバイザーは、1・2年生合わせて約600名の学生に対するキャリア形成支援を担当していかなければならなくなった。2年目はキャリアアドバイザーが3名に増えたものの、当学部約600名の学生全員を個別に支援していくことは難しいと感じていた。また1年目学生と接した経験から、学生たちのキャリア形成支援には、キャリアアドバイザーが個別に相談に応じて対応するだけでなく、学生同士が互いにキャリア形成を支援し合える試みが必要なのではないかと考えていた。

そこで2年目は1年目の活動に加え¹⁴、学生が主体となって企画し、キャリアアドバイザーが関わりながら、他の学生に参加してもらえるイベントを実施することで、学生同士が互いにキャリア形成を支援し合える試みに取り組んだ。次に実際に実施したイベントの取り組み事例を紹介する。

(4) 2年目の取り組み事例

【事例】上級生による新入生のための履修相談会

①実施の経緯

2003年度、学生からの相談で最も多かったのは、入学直後の履修に関する相談であった。この履修相談には、履修に関する疑問だけでなく、高校までと違った学生生活への不安を感じて相談に訪れる学生も多かった。しかしこれらの履修に関する相談は、入学後すぐから4月の履修登録期間¹⁵までに集中しており、昨年は2名のキャリアアドバイザーだけでは十分に対応しきれず、相談に応じられない学生もいたのが現状である。さらに2年目は、新入生だけでなく2年生からの相談にも対応しなくてはならないため、キャリアアドバイザーだけで1、2年生両方のキャリア形成支援に個別に取り組んでいくのは難しいと感じていた。

そこで履修に関する疑問や入学後の不安を実際に経験した学部2年生の協力を得て、一人でも多くの新入生の履修相談に応じることができないかと考え「新入生のための履修相談会」を企画することとした。

②実施までの準備

履修相談会の実施までの準備は、図表4のよう

図表4 2004年度 履修相談会実施までの経緯

実施日	内容
3月10—20日	履修相談会学生アドバイザーの募集
3月22日	履修相談会学生アドバイザーの決定
4月3日	第1回打ち合わせ(企画趣旨、内容説明)
4月5日	第2回打ち合わせ(役割練習)
4月6日	新入生向けオリエンテーションで履修相談会のPR
4月12—14日	入門ゼミにて履修相談会のPR
4月14日	履修相談会の開催
4月15日	
4月17日	
4月19日	
4月20日	

に進められた。まずキャリアアドバイザーが4月に5日間、予約なしで相談できる履修相談会の日程を設定し、新入生のアドバイザーを務めてくれる新2年生を公募で募集した。その結果、14名の新2年生からの応募があった。そこで履修相談会を担当してもらう前に、応募してくれた学生アドバイザーに対して、今回の企画の趣旨や企画内容を説明する第1回打ち合わせを実施した。次に第2回打ち合わせでは、履修相談会で新入生からの相談に応じる学生アドバイザーとしての心得えやアドバイスする方法について説明した後、学生アドバイザー役と新入生役を体験する役割練習を行った。この役割練習では、学生アドバイザーという立場で“新入生にどういう態度で接するのが良いのか”、“新入生からの相談にどう応えるのが良いか”を考えるとともに、新入生の立場からも“先輩の学生アドバイザーにどういう態度で接してもらうのが良いか”について、役割練習を通じて改めて考えてもらうことを目的に実施した。実際に役割練習では、新入生役に「キャリアデザインって何ですか?」や「単位を取りやすい科目はどれですか?」といった学生アドバイザーが答えにくい質問も用意し、学生アドバイザーとしてどういった回答をするのが良いかについて、役割練習を通じて考えてもらった。

さらに役割練習後には、全員で話し合う場を設け、実際に役割練習を通じて学生アドバイザーとしてどのような対応が適当なのか、先輩の学生ア

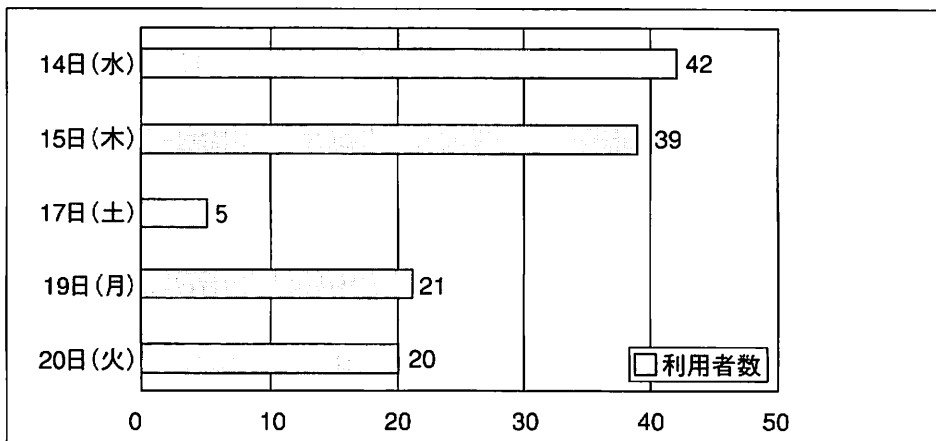
ドバイザーとして責任を持ったアドバイスをするにはどんな回答が望ましいのか等について意見を聞くとともに、学生アドバイザーとしての接し方を考えてもらう時間を設けた。このような役割練習や話し合いを実施していく中で、学生アドバイザーたちから「相談するときの机や椅子の配置はこういう風にしたほうが相談しやすいのではないか」や「新入生に来てもらうためには、こんなPR活動をしたらどうか」といった様々な提案が出されるようになった。そこで学生アドバイザーからの意見を積極的に取り入れながら企画を進めていった。

③実施の様子

これらの準備を経て実施した5日間の履修相談会には、累計で127名の利用があった。5日間の相談件数は図表5の通りで、初日と2日目に多くの新入生が利用した。

履修相談会当日、14名の学生アドバイザーたちは、新入生からの相談に各自授業の空き時間を利用して対応してもらい、学生アドバイザーが対応しきれない場合は、キャリアアドバイザーも相談に応じた。さらに当日は新入生からどのような相談が寄せられたのかをキャリアアドバイザーが知っておくために、学生アドバイザーに各自が担当した新入生の相談記録¹⁶をつけてもらった。また、新入生がこの相談会を活用できたかどうかを確認するために、利用した新入生にはアンケートに協

図表5 2004年度 履修相談会利用状況¹⁷



力してもらった。

④実施の効果

この企画を実施した結果、累計127人の新入生が利用し、利用した新入生へのアンケートでも、利用者の満足度が高いことが明らかになった¹⁸。今回の履修相談会に参加した動機で最も多かったものは、「科目履修の方法」に関する相談であった¹⁹が、その他にも「先輩と話しがしたかった」や「大学生活での不安」のために利用した新入生も多かった²⁰。実際に利用した新入生からは、「先輩と話して、先輩の熱心な姿勢にふれ、この学部に入ってきて本当に良かったと思った。」と言う声も聞かれた。また学生アドバイザーを務めた2年生にとっても、自分の学部を見つめ直し、先輩として後輩をアドバイスすることの難しさを体験すると共に、興味を持ったことにチャレンジすることの面白さを知るきっかけになったようである²¹。

【その他の事例】

2年目はこのイベント以外にも、受験生にキャリアデザイン学部を紹介する「オープンキャンパスの学部企画」や「キャリアを考える学生主催のイベント」など、学生が主体となって実施する取り組みをキャリアアドバイザーが支援する試みを実施した。これらのイベントはいずれも学生が自主的に企画・参加、実施したものであり、キャリアアドバイザーは必要に応じて、学生の企画にアドバイスをしたり、イベント運営をサポートしたりする形でこれらのイベントに参加した。例えば「キャリアを考える学生主催のイベント」では、当学部の学生に向けて、ダンスやイラストレーションなどのアーティスト活動に取り組んでいる2年生4名²²が、大学で学んだことを自らのアーティスト活動にどのように活かしているか、さらにそれらを今後どのように自らのキャリアに活かしていきたいかについて、現在の活動の様子を交えながら発表した。

2004年10月4日に開催されたこのイベントには、75名の学生が集まった。当日参加者にイベントの感想を求めるアンケートを実施した結果、イ

ベント実施に対する満足度は非常に高く²³、「とても良い刺激になった。触発された。」や「大学の勉強などをいかに将来にいかせるか考えさせられた。」などの意見が寄せられ、参加した学生に良い刺激を与えることができたイベントとなった。また参加者だけでなく、実際にイベントに関わったスタッフにとっても、これまで経験したことのないイベントを創り上げるという作業の中で、様々な経験から学ぶことがあったようである²⁴。

(5) これまでの取り組みから

上記のように1年半、キャリアアドバイザーとして低学年のキャリア形成支援のための試みを実施してきた。その結果、低学年のキャリア形成支援を進める上では「学部教職員との協力と連携」、「学生参加型のキャリア形成支援体制作り」の二つが必要であることが明らかになった。

①学部教職員との協力と連携

これまでの取り組みを振り返ると、1年目からキャリアアドバイザーが授業に参加し、相談ルーム以外の場所で学生と関わりを持つ機会が持てたことは、学生たちにキャリアアドバイザーの存在を知らせるとともに、2年目以降の取り組みを考える上で効果的な試みであった。特に低学年の場合、進路選択を考えるまでには時間があるため、進路相談について個別の相談を定期的に利用する学生はほとんどいなかった²⁵。そのため低学年からのキャリア形成支援を進めるためには、キャリアアドバイザーが個別相談に対応するだけでは十分ではなく、授業に参加するなどの形で、相談ルーム以外の場所でも学生と話をする機会を持ったり、学生が主体となって実施するイベントの開催を支援したりと、様々な形で学生のキャリア形成支援に取り組んでいく必要があることが明らかになった。

しかしこのような取り組みをキャリアアドバイザーが進めていくためには、学部教職員にこれらの取り組みの必要性を理解してもらうとともに、実際に授業参加やレポート作成のアドバイスを担

当する機会を与えてもらうなどの協力と連携を図る必要がある。

②学生参加型のキャリア形成支援体制づくり

1年目はキャリアアドバイザーの存在を知らせることに重点を置いた取り組みを実施したが、2年目からはイベントの実施など通じて、学生参加型のキャリア形成支援体制づくりにも積極的に取り組んだ。このような取り組みを実施したのは、学生にキャリアアドバイザーの個別相談を利用してもらっただけでなく、学生自身に参加してもらいながら、学生同士が互いにキャリア形成を支援し合うための試みをキャリアアドバイザーが仕掛けることができなかつたかと思えたからである。また学生は、企業への就職を希望する学生だけでなく、独立して活躍したいという学生や、教職やカウンセラーなど、様々な進路先を希望しているものや、まだ進路が決まらず不安を持っている学生もいる。そういった多様な学生たちのキャリア形成支援に、限られた人数のキャリアアドバイザーだけで対応するには限界がある。このようなイベントを実施したのは、キャリアアドバイザーが個別相談でひとり一人を支援するだけではなく、イベントなどを通じて、同じ価値観を持つ学生同士が出会ったり、違う考えを持つ学生の意見に触れて刺激を受けたりすることが、各学生が自らのキャリア形成を進めていく上で役立つのではないかと考えたからである。結果的にイベントを通じて、それを主催した学生や参加した学生には、様々な形で自らのキャリアを考える機会を提供することができた。

5. 低学年からのキャリア形成支援に関する今後の課題

本稿では大学における低学年からのキャリア形成支援の方法について考察するために、筆者が取り組んできた低学年からのキャリア形成支援の具体的な試みを時系列で紹介し、それぞれの取り組みの効果を分析した。その結果、キャリアアドバイザーという立場で、低学年のキャリア形成支援

を進めていくためには、個別相談や情報提供といった取り組みだけではなく、実際に授業に参加するなどの形で、相談ルーム以外の場所でも学生と話をする機会を持ったり、学生が主体となって実施するイベントを開催したりと、様々な方法で取り組んでいく必要があることが明らかになった。

実際にこれらの取り組みを実施してきた結果、これらの取り組みに参加した学生には、効果的であったと言える。しかし今後は、それらの経験を具体的にどう進路選択に結び付けていくのか、また取り組みに参加していない学生に、どういったキャリア形成支援をしていくかが、今後の大きな課題である。またこの取り組みに限って言えば、当学部は新設学部のため、第一期生に当たる学生を卒業時にどう送り出していくかも、学部全体のキャリア形成支援の取り組みの評価につながると考えられる。今後は学部教職員との協力・連携だけでなく、学内の様々な部署との協力・連携体制をつくりながら、3・4年生のキャリア形成支援の方法を進めることがもう一つの大きな課題であろう。

——— 注 ———

- 1 平成15年度学校基本調査によると、大学生の就職率は55.0%で、前年度より1.9ポイント低下し、過去最低となった。
- 2 労働政策研究・研修機構（2004）『企業が参画する若年者のキャリア形成支援－学校・NPO・行政との連携のあり方－』労働政策研究報告書No.11 第2章pp15-35
- 3 産労総合研究所（2004）『企業と人材』（2004年10月20日号）pp10-15
- 4 日本私立大学連盟就職委員会（2004）『就職委員会レポート キャリア形成支援に向けて－学生の豊かな人生のために－』日本私立大学連盟
- 5 法政大学発行の新聞「法政」2003年1月号座談会記事より引用
- 6 法政大学キャリアデザイン学部案内P4-5を要約して引用
- 7 合宿に参加した1年生へのアンケートの結果から、

8割を超える回答者が合宿を「とてもよかった」「まあよかった」と評価し、積極的に参加した人ほど、合宿の総合評価が高くなっていることが明らかになった。また参加した学生からは、「グループでキャリアについて考え、意見を出しあって、最終的にはひとつの答えを出してみるという、それらができたことで、当学部に入ってよかったと思った。」や、合宿全体を通じて「先輩方はしっかりした将来設計ができていて、自分もこれからしっかり考えていこうという意識が新たに生まれた。」などの感想が寄せられた。(キャリアデザイン学部発行キャリアニュース第11号(2004年6月4日)より引用)

8 ただし、社会人としての基本スキルが身につけている学生は、この科目の履修は免除される。

9 この担当業務は厳密な取り決めではなく、学生のキャリア形成支援の必要に応じて、キャリアアドバイザー制度運営委員会の教員らと相談しながら、柔軟に業務内容を追加・変更することが認められているものであった。

10 この公務員の希望者の中には、教職希望者も含まれている。

11 キャリアデザイン学部では月～土曜日(1～7時限)に配置されている科目を自由に履修できる柔軟な時間割編成「フレックス・プログラム」を採用しているため、キャリアアドバイザーは交代で週に2日程度20時30分まで勤務し、夕方以降の相談にも応じられる体制を取っている。

12 相談会は前期(5～7月)・後期(1～3月)に実施した。前期の相談利用件数は62件、後期8件であった。

13 履修に関する相談は4月に集中しており、その件数は102件であった。

14 当学部の学生全員を対象とした相談会は2年目からは実施していない。

15 法政大学では、前期履修する科目を4月の下旬に登録をする制度を採用している。

16 記録には、担当した新入生の学生証番号、名前、相談内容、学生アドバイザーとしてのアドバイスを記入してもらった。

17 キャリアデザイン学部発行キャリアニュース第10号(2004年5月7日)より引用

18 アンケートの結果、96%の学生が参加して良かったと回答した。どちらともいえないと回答した4%は、自分の履修したい科目を先輩が履修していなかったため、情報が得られなかったといったものであった。

19 基礎・専門科目の履修がわからない(80名)、教職科目の履修がわからない(21名)、資格科目(学芸員など)の履修がわからない(10名)

20 先輩と話がしたかった(23名)、大学生活での不安(18名)

21 キャリアデザイン学部発行キャリアニュース第10号(2004年5月7日)学生アドバイザーへのインタビュー参照

22 イベントには4名の出演者であるアーティストと司会者1名に加え、これらの活動趣旨に賛同した3名のスタッフが加わり、計8名で企画から実施までの準備を進めた。

23 参加者(75名の学生、4名の教員)に実施したアンケート結果。回収率は72%。「今回のイベントはいかがでしたか」の質問に対し、「非常に良かった」が62%、「良い」が33%、「普通」5%、「つまらない」0%であった。(キャリアデザイン学部発行キャリアニュース第13号(2004年11月5日)より引用)

24 スタッフからは、「イベントのテーマやコンセプトをどうやって出演者やスタッフ、来場者に伝えるかといったイベント作りの難しさを学ぶとともに、チームで何か一つのことを創り上げることの面白さを知ることができた。」という感想が寄せられた。(キャリアデザイン学部発行キャリアニュース第13号(2004年11月5日)イベントスタッフへのインタビュー参照)。

25 進路に関する相談に訪れた学生は少なくないが、まだ学生が1・2年生であるため、定期的にキャリアアドバイザーと相談しながら自らのキャリア形成を進めて行くといった形での相談はなかった。